



チンチン電車の面影たどり 伊達から福島へ

昭和46年に廃止されるまで、県北(信達)地方には、半世紀以上にわたり活躍した路面電車(通称・チンチン電車)があった。消えゆくこの電車の記憶を次世代へ伝えようと取り組む人々がいる。その熱い思いに触れ、今も残る面影の地をたどりながら、路面電車が活躍した古き良き時代に思いを馳せてみたい。

チンチン電車は養蚕によって 隆盛を極めた歴史の証人

明治41年、地元有志が出資し、兩宮啓次郎が責任者となって信達軌道株式会社を設立。軽便鉄道を開業した。当時の伊達地方の経済が、いかに養蚕業によって隆盛を極めたかを物語する証だ。昭和のはじめに電化と改軌がなされ路面電車(チンチン電車)に生まれ変わった後も、地域に貢献し続けた。昭和46年に惜しまれながらその役目を終えると、沿線各地に9輛の電車が寄贈された。しかし、時の流れとともに解体廃棄され、現存する車体は3輛。その中の1輛が、今年4月

に修復され保原中央交流館の敷地の一角に展示保存されている1116号だ。

人を笑顔にする路面電車を 伊達地方の復興の力に

保原ロータリークラブで、この路面電車修復に携わった中心メンバーの渡辺英人さんに経緯を伺うと、「一番の目的は、大震災と原発事故がもたらした心の影を吹き払うことでした」と話してくれた。無ければ自分たちで鉄道を敷いてしまう

修復されたチンチン電車の照明を灯し夕暮れ時に撮影。「昔は外灯も少なく、特に秋はすぐ暗くなった。そこに電灯をつけた電車が走ってくると、そこだけポツと明るくなるんですよ。忘れられない風景です」と安齋さん



保原ロータリークラブ「路面電車1116号修復保存プロジェクト」実行委員
渡辺英人さん
1980年生まれ。「(有)渡辺自動車」社長。目下、この車両を活かした冬のイルミネーションを思案中

「路面電車を保ぶ会」会長
安齋 武さん
1941年生まれ。県北各地で路面電車の写真展を不定期で開催。次なる夢は、曹山にある1115号も修復し、2輛とも実際に走らせることだとか



ほど憂快だった100年前の先人の生き方。戦後の復興を力強く後押ししたチンチン電車を修復し、その物語を子どもたちと分かち合うことで湧き上がる元気を、これからの力にしてゆこうと考えたのだという。「当時の海老原会長のもと、保原ロータリークラブ創立50周年記念事業として取り組むことになりました」
修復のプロジェクトには、もう一人キーマンがいる。旧伊達町伏見で生まれ育った安齋武さんだ。幼い頃からの鉄道ファンで「路面電車を保ぶ会」の会長として、写真展を開催するなど歴史を語り継ぐ活動をしている。「昔は只渡す限り田んぼ、その間を悠々と走る電車を見るのが好きでした。お気に入りのは1116号。走り出しが速く、ぐんぐん勢いを増して行く時のモーター音や、レールのつなぎ目を通過するときの音が最高でした」と話す。「今でも県内全域に多くのファンがいます。私は『御島の宝』だと思っています」

プロジェクト発足当初、渡辺さんが安齋さんのもとへ挨拶に訪れたことで、話は一気に進んだ。それから約1年。車体の色や装飾品の考証、資金調達まで共に苦勞を重ねながら迎えたお披露目の日は、お互い感無量だったという。「不思議なことにチンチン電車の前では、みんな笑顔になるのがうれしい」と渡辺さん。今後は、この車両が保原中央交流館の研修室の一つとして、読み聞かせやサークル活動などで、広く市民に利用されていくことを願っているそうだ。



保原中央交流館の北側に保管されていた修復前の路面電車。長年放置され痛みが激しかった。その姿に心を痛めていた人も多く、安齋さんと渡辺さんもその一人だったという(写真提供/保原ロータリークラブ)

1. 毎月第1日曜日の10時から15時まで開催する内部見学会(参加無料)の1コマ。安齋さんの解説のほか、運転手や車掌だった方が当時の話を披露してくれることも。来場者はお手製の乗車券がもらえる。また、写真展は10月24日(土)・25日(日)に伊達体育館で開催予定。詳しくは「路面電車を保ぶ会」(☎090-3123-7189・安齋さん)まで
2. 地元写真館の協力を得て復元したレトロな車内広告ポスターも
3. チンチン電車の名前の由来となった信鈴(しんれい)
4. 懐かしい空気が漂う車内。修復を機に冷暖房を完備した

